

丹沢山地におけるニホンカモシカの生息密度 (2017-2021 年度)

永田幸志 *,**・永井広野 *,***

Density of Japanese serow in the Tanzawa Mountains

Koji Nnagata*,**, Koya Nagai*,***

1. はじめに

ニホンカモシカ (*Capricornis crispus* 以下カモシカ) は、特別天然記念物に指定されており、神奈川県レッドデータ生物報告書(神奈川県生命の星・地球博物館 2006)により準絶滅危惧種に分類されている希少動物である。しかしながら、神奈川県における生息状況については、基礎的な情報が極めて少ない状態であった。このため、永田ら(2007, 2018)は、2004～2005年度および2012～2015年度に神奈川県自然環境保全センターが実施したニホンジカ (*Cervus nippon* 以下シカ) の生息密度調査(11月～1月に実施)の際に目撃されたカモシカの個体数から丹沢山地における生息密度を算出し、シカに比べて低い生息密度で生息していることを確認した。しかしその後、神奈川県のカモシカの生息状況に関する調査は行われておらず、依然として基礎的な情報が不足していた。

そこで本稿では、継続実施されているシカの生息密度調査時に目撃されたカモシカの個体数から、新たに2017年度～2021年度の生息密度を算出したので報告する。

2. 調査地域

調査地域は丹沢山地を含む、神奈川県相模原市(旧津久井町の範囲)、秦野市、厚木市、伊勢原市、足柄

上郡松田町、足柄上郡山北町、愛甲郡愛川町、愛甲郡清川村であり、標高100m程度の山麓域から標高1600m程度の高標高域まで広域を対象に実施した。

3. 調査方法

神奈川県では、ニホンジカ管理計画に基づくモニタリングとして、区画法(Maruyama and Furubayashi 1983)による生息密度調査が2003年度以降毎年度実施されている(神奈川県 2023)。調査区は、概ね、ニホンジカ管理計画(神奈川県 2017)に示された管理ユニットごとに丹沢山地に48箇所(2021年度時点)設定されている。調査は、管理捕獲が行われている管理ユニット等、毎年30箇所程度で実施しており、3年程度で全ての調査区で調査が実施される(毎年調査される調査地もある)。

調査は、森林内の見通しがよくなり発見精度の高くなる11月下旬から1月下旬にかけて実施した。調査地域は急峻な場所も多く、調査時に危険を伴うため、あらかじめ踏査ルートを設定して行った。調査時間は1時間30分とし(踏査ルートの距離が長い丹沢山調査区は2時間)、踏査ルート上で目撃したシカに加えて、カモシカについても発見時刻と頭数を地図上に記録した。

2017年度から2021年度の5か年で実施された調査結果から、カモシカの目撃頭数と調査面積を用いて生息密度を算出した。なお、県による調査以外に、

* 神奈川県自然環境保全センター自然保護公園部野生生物課 (〒243-0121 神奈川県厚木市七沢 657)

** 現所属 神奈川県環境農政局緑政部自然環境保全課 (〒231-8588 横浜市中区日本大通 1)

*** 現所属 神奈川県西地域県政総合センター森林部水源の森林推進課 (〒258-0021 神奈川県足柄上郡開成町吉田島 2489-2)

清川村の札掛調査区では、NGOである丹沢けものみちネットワークが毎年ニホンジカの生息密度調査を実施している(永田・岩岡 2011)ため、札掛調査区を加えて49箇所の調査区についてカモシカの生息密度を算出した。ただし、同一調査区で複数年に目撃のあった場合は最も高い密度を代表値とした。

4. 調査結果および考察

2017年度から2021年度の5年間に累計167箇所で開催された調査区は、カモシカが目撃された調査区は49箇所中32箇所(複数年で目撃のあった調査区は15箇所)(図1)、5年間の累計では51箇所であった。

生息密度の最大値は三廻部林道調査区と大室山下調査区の2.1頭/km²であり、平均は0.6頭/km²であった。調査期間中、シカの生息密度が20頭/km²以上になる調査区が複数あったこと(神奈川県 2023)と比較して、カモシカは極めて低い密度で生息していると考えられた。また、2012～2015年度の生息密度は、最大2.2頭/km²、平均0.4頭/km²であった(永田ら 2018)ことから、生息密度に大きな変動はなかったと考えられる。

カモシカは当歳子をつれていないメス以外は、ほとんど単独かつ縄張りをもって生活する(岸本 1996、落合 2016)ため、シカのように極端に高密度化することは少ない。他地域でこれまでに観察された事例でも生息密度は低く、環境省(2010)が実施した全国調査では2～3頭/km²程度と報告され、文化庁(2022)が全国の保護地域で実施した調査(2015年～2021年実施)でも3頭/km²以下程度の生息密度となっている。調査方法が異なるため単純な比較はできないものの、丹沢山地のカモシカの生息密度も、全国と比較しても同程度の生息密度と考えられた。

カモシカはシカのように自然植生にインパクトを与えることはない(環境省 2010)とされており、丹沢山地でも自然植生への影響や農林業被害は報告されていない。むしろ生息密度が極めて低いと考えられる現状では、保護の必要性が高いと考えられる。また、箱根山地においてカモシカは、神奈川県レッドデータ生物調査報告書では1995年時点で生息していないとされており(神奈川県立生命の星・地球博物館 1995)、明治期に絶滅したと推測されている(關 2022)。しかし、近年、箱根山地では自動撮影カメラ

によるカモシカの撮影記録が報告されており(關 2022)、今後その動向が注目される。

生息密度の低い動物は直接観察による調査で生息状況を把握することが難しいため、今後、丹沢山地でも各種事業で実施されている自動撮影カメラ調査の結果を活用して、希少動物であるカモシカの生息状況を把握する必要があると考える。

5 謝辞

本報告で用いたデータは株式会社野生動物保護管理事務所への委託調査結果及び、丹沢けものみちネットワークから提供していただいたものである。関係各位に厚くお礼申し上げる。

6 文献

- 文化庁(2022)カモシカ保護管理マニュアル. pp191.
 神奈川県(2023)令和3年度神奈川県ニホンジカ管理事業実施計画 実績編. pp30.
 神奈川県(2017)第4次神奈川県ニホンジカ管理計画. pp47.
 神奈川県生命の星・地球博物館(2006)神奈川県レッドデータ生物報告書 2006. pp442.
 神奈川県生命の星・地球博物館(1995)神奈川県レッドデータ生物報告書 1995. pp257.
 環境省(2010)特定鳥獣保護管理計画策定のためのガイドライン(カモシカ編). 46pp
 岸本良輔 1996, ニホンカモシカ. 日本動物大百科. 平凡社: 106-111.
 Maruyama, N and Furubayashi, K(1983)Preliminary examination of block count method for estimating number of sika deer in Fudakake. Journal of Mammalogical Society of Japan, 9:274-277
 永田幸志・羽澄俊裕・瀧井暁子(2007)丹沢山地におけるニホンカモシカの生息密度. 丹沢大山総合調査学術報告書. 163-164
 永田幸志・岩岡理樹(2011)丹沢山地札掛地区におけるニホンジカ(*Cervus nippon*)生息密度. 哺乳類科学 51(1). 53-58
 永田幸志・町田直樹・谷川潔(2018)丹沢山地におけるニホンカモシカの生息密度. 神奈川県自然環境保全センター報告 15:51-53.

